

いい加減にしてくれ。私は目の前の光景に、うんざりした気分になった。予定より早く出張先から戻つてみれば、またこの仕打ちか——

寢室のベッドで女房とあいつが裸で寄り添い寝ている。どう見ても、男女がコトを終えた後としか思えないありさまだ。きつく鼻をつく生々しい異臭が、絡み合う2人を容易に想像させる。何度も頭を振り、脳ミソから追い出そうとするが、叶わなかった。

私の留守をいいことに男を連れ込むなんて、許せるわけがない。腕の中で眠る女房の顔は、無邪気な子猫のようで、私に見せるどの顔とも違っていた。それがまた腹立たしかった。

もう何度目になるだろう。私は女房を叩き起こして怒鳴りつけた。しかし相変わらず反省の色は見えない。眠りを遮られた事への不満からか、ふてぶてしい顔で睨みつけてきた。そして、若かった頃からするとすっかり変わってしまった、丸い身体にガウンを羽織り、タバコをくゆらし始める。動じることなく堂々としているのは、女房には、浮気をしているという実感がなからなのだろう。それでも女房の横にいるこいつは、生

身の人間の男だ。この男を選んだ事自体が、今の私への否定に他ならない。

それにしても、いつから女房はこんな品も恥じらいもない、若い男を貪る年増の女になってしまったんだ。原因は私にあるのだろうか。確かに仕事が軌道に乗り、かまつてやる時間は減った。しかし女房のワガママは何だつて受け入れてきた。欲しいと言う物は、何だつて買ひ与えてきた。その仕打ちがこれか。

私は女房の隣で怯えているあいつに視線を向ける。不思議でならない。こいつのどこが良いんだ。ただ若いというだけで、稼ぎもなく人望もない。性格だつて、口ばつかりで薄っぺらじゃないか。女癖だつて悪い。年上好きする童顔を武器に年増の女から金を筆りとつている最低なヤツじゃないか。

それに比べ私は、地位も名誉も手に入れた。人望も熱い。稼ぎも今や世界のトップ10に入る。それに何より、女房一筋だ。どこをどう取つても劣つているところなんて見当たらないじゃあないか。

さらに険しい顔で睨みをきかすと、あいつは女房の影に隠れる。まったく馬鹿にしようがつて。知っているぞ。お前はこの状況を楽しんでる。それにお前は女に甘えるのだけは得意だったな。だが誤魔化せるわけがないだろう。私を誰だと思つている。

頭に来た私はいかに、あいつに殴りかかる。

しかし女房が必死に盾となつて、私の手を弾く。

「彼に手を出したらどうなるか、あんた分かつてるの」

そんな事は百も承知である。それでも私の気は治まらない。女房がヒステリックに叫ぶ。

「やめて。これは浮気じゃないって何度言つたら分かるの」

「浮気でなかつたら、何なんだ」

「偉そうな事言わないで。今のあんたがあるのは、誰のおかげよ。私だって少しぐらい良い思ひしたつていいじゃない」

確かに。今の私があるのは女房のおかげだ。

女房に出会う前の私は、口ばかりの薄っぺらな男だった。研究者としてはまだまだ未熟で、その鬱憤を行きずりの女との火遊びで晴らしていた。女房に出会つてなければ、何処かの女性に刺されて死んでいたかもしれない。そんな私を変えてくれたのは、まぎれもなく女房だった。

一回り年上の寛大な女房の包容力にはずっと支えられてきた。研究室に籠りきりの私の健康を気遣い、わざわざ弁当を手造りして持ってきてくれたのは彼女だ。とても献身的に私の面倒を見ていてくれた。

そのおかげで、私は夢を叶えることが出来た。実現不可能と言われたタイムマシンを發明するという偉業をやつてのけたのだ。しかし……

しかしだからと言って、タイムマシンを使い、若い私を連れ込んでいいわけがないだろう。これは浮気ではないという女房の言い分は正しいかもしれない。それでも、昔の私に女房を寝とられるというのは、今までやってきた事への否定に他ならない。

考えてみれば女房の陰に隠れて、情けない顔で私を見詰めている昔の私も、今の私を目指しているわけで、今の私は私史上最高の私なんだ。こんな地位も名誉も人望もない、何も持っていない昔の私に、今の私が負ける事などあつてはいけないんだ。

カツとなつた私は女房を跳ね除けて若かりし頃の私に飛び掛かったのだが、やはり歳には勝てない。ギクリと腰をいわしてしまい、その場から動けなくなつてしまった。情けない。

女房が苦しむ私の顔を見下ろしている。

「もう終わりにしましょう。あなたと別れるわ。そして、彼と一緒にになる」

「な、何を言っている。冷静になれ」

「彼はね、あなたが持つてないものを持つてるの」

私が持つてないもの、だと。そんなものがあるわけない。私はよく知っている。今の

あいつには誇れるものなんて何一つないのだ。

そんな奴が私の持つてないものを持つているわけなどない。

「彼はね、あなたが持つてない、夢を持つてゐるの。支えてあげたいの」

女房は分かつてない。それを支えた結果が今、自分の目の前にあるという事を。怒りのあまり腰を痛めて立てなくなつてゐる、この惨めな私の姿こそがそれなのだ。

くそお、昔の私に女房を取られるぐらいなら、過去に行つてタイムマシンの開発を阻止するしかあるまい。

それも叶わないか。そんな事したら、過去に行つたきり、現代に戻つて来られなくなつてしまう。

皮肉なものだ。タイムマシンがここにあるというのに、私はこの目の前の今を受け入れるしかないらしい。